

音順	方劑名 傷寒論・金匱要略条文	生薬構成 および製法・服用方法
かー17	還魂湯	<p>読み および解説・その他</p> <p>麻黄（苦温）3g・杏仁（甘温）3g・甘草（甘平）1g 上の3味を水320mlを以って120mlとなし、滓を去り、2回に分けて咽の方に垂らし込む。 全ての、急に意識不明になった者を治す。</p> <p>又の方 菴根（辛微酸温樞）生の根30g・烏梅（酸平）2個～7個・呉茱萸（辛温）炒る2.5g 上の3味を水400mlを以って煮て、病人の櫛を取ってその煮汁の中に入れてブツブツと3沸せしめ、沈む人は死するという。櫛を取り出し、それを120mlに煮詰め、2回に分けて温服せしむ。もし櫛の沈んだ者にも念のため与うべきであろう。 櫛は昔は木の櫛であるから、木の櫛が陽気を多く吸ったものは軽いし、少ないものは沈むのである。即ち平常頭の陽気の強いものは生き、陽気の少ないものは死ぬのである。</p>
<p>雑療法第二十三第12条（金匱要略）</p>		
<p>「卒死客忤死を救うには還魂湯之を主る。</p>		
<p>「千金方にいふ、卒忤鬼撃飛尸諸の奄忽気絶し復覚え無きを主る。或は已に脈無く口噤して拗け開かず歯を去り湯を下す。湯口に入り下らざる者、病人髪を左右に分け、肩をおさえて之を引き、薬を下し復増して一升を取れば須臾にして立に甦る。」</p>		
<p>卒死、客忤死、主る、卒忤鬼撃飛尸、奄忽、復、已に、口噤、拗け（拗っても）、須臾、立に甦る</p>		
<p>解説 気絶したり、急に驚いて意識不明になったものを救うには、還魂湯が主治する。</p>		
<p>「千金方に、卒忤鬼撃飛尸による諸の奄忽と気絶して復覚え無くなり、或は已に脈無くなったのも治す。口噤して拗っても開かなければ歯を去いて湯を下れよ。湯を口に入れても下らなければ、病人の髪を左右に分けて捉え肩を押えて之を引け。薬が下れば復増して一升を取らしめると須臾にして立に甦る」とある。</p>		
<p>卒忤とは、客忤とも言い、邪客の気（鬼厲の毒気）が卒に（急に）人の精神を犯したものだ。</p>		
<p>鬼撃とは、鬼厲の毒気が人を撃つたもので、急卒に人を刀矛で刺すが如く胸脇腹が絞痛して抑えられず、吐血、衄血、下血を伴う。人の血気が虚弱したところに鬼神の気と接触したからであり、死ぬことが多い。</p>		
<p>飛尸とは、漸時に発するものではなく、忽然発作し飛走の急疾に似る、その状は心腹が刺痛し氣息が喘急して脹満し、心胸に上衝する。</p>		
<p>還魂湯証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「よく卒死した者、又は客忤によりて死したる者を救ふ。卒死とは急に人事不省に陥りたる者を謂ふ。客忤死とは急に驚いたる様子をして気絶したる者を謂ふ。」と記されている。</p>		